

るために、ある種の熱狂を伴って構築され、異常な程の厳格さをもって実行されたのである⁽²²⁾と述べている。

ゴロヴニンは、貧困が原因で奥羽や関東の地方で特に多かった「間引き」という子殺しの慣習について、次のように述べている。

日本のこの驚異的な人口のため、貧しい人々は子供が生まれた時に、その子達の体が弱かったり奇形の兆候が見受けられると殺してしまうことがよくある。法律はなんらかの罰則を定めてこうした殺人を禁じてはいるけれども、政府がどのようにして子供が死んだかを厳格に取り調べることはない。それはおそらく、政治的な理由のためであろう。釈明のためにそうした両親が呼び出されることもなく、この種の犯罪は繰り返されている。(『日本幽囚記Ⅲ』人口と軍事力)⁽²³⁾

ニコライは、この問題をどのように見ていたか。

明々白々な例がある。四〇年前の日本の人口は二五〇〇万人だった。それがいま五〇〇〇万人になった。日本という国ができてから二五〇〇年「神武天皇から数えた皇紀」かかって二五〇〇万人になったのだが、最近の「明治になってからの」わずか一〇年間に同数の二五〇〇万人も人口が増えたのである。このような、想像もつかないようなことが、どうして起きたのか。……開国前の日本では、政府が厳禁していたにもかかわらず、大規模な嬰兒殺しが行われていた。だが、いまでは嬰兒殺しは聞かれなくなり、日本中に慈善施設がたくさんできた。だれのおかげで日本はこうなったのか。救世主キリストのおかげである。生命を与えるキリストの霊の風が日本に吹き渡って、それまで日本の上にかかっていた、死をもたらす覆いを

吹き払ったのだ。(一九〇八・九・四)⁽²⁴⁾

わが子イサクを神の犠牲に供しようとした旧約聖書のアブラハムを描いたレンブラント・ファン・レインの作品「イサクの犠牲」では、イサクの喉元へナイフを振り下ろそうとするアブラハムの右手を天使が掴んで制止している。この逸話は自分の最も愛する者を神に返せるかという信仰の反問であって、宗教はあくまで「子殺し」の禁忌として機能している。この日本人の風習は、とりわけキリスト教徒には容認できないものであったに違いない。一七三六年に『日本誌』を著したシャルルヴォアも「かくも文明化した国と人々の中で、両親に養う能力がないと、嬰兒を絞殺する風習があることは驚きである」とこの問題に触れ、「しかし日本人は、それは人間性の弱さが美德を立ち上げようとしなのではなく、自分達の子孫が苦勞のみの生涯を送らないようにと願う、人間愛に従った行為であると信じているのだ」と述べている。⁽²⁵⁾

日本人がこのような問題に全く無関心であったわけではない。佐藤信淵は『経済要録』の中で、ある老農から教えられた北国の風聞として、「此城下にて孕婦墮胎して兒を殺すこと年に一萬に餘ると云へり、頗る富盛の間へある国すら斯の如し、況や貧国をや」と間引きの実態について述べ、「人誰か己れが子を愛せざる者あらんや、然れども貧の甚しきに至ては、往々己れが子を殺す者あり」と悲憤している。⁽²⁶⁾

その序言によれば、佐藤家は元々医を家業としていたが、飢饉に万民が流散し餓殍する様を見て、医は事小さく広く救に足らず、「願ば国家困窮して万民飢寒に迫の大患を濟べき道あらんと」、「経済の学に志し」という。信淵は、天明元年（一七八一）に蝦夷地から始め、数年をかけて東北、奥州、羽州の各地を父と遊歴した。天明の飢饉下の各地の惨状を目にした体験が、信淵に経世済民の道を歩ませたに違いない。⁽²⁷⁾

信淵の問題意識は、飢饉への問題意識が民俗学へと駆り立て、かつ農商務省を志す契機となったという後の柳